Japanese Association for Religious Studies

ゴリーの地平にあるのではなく不同不異なのである。ベルクソンは一と多についてより多くの頁を割いているが、この一と多という二項対立的表象は、われわれの空間表象においてなされる「重ね合わせによる単位」を設定する時はじめて成立する。ベルクソンが空間表象を不純だと見なす根拠はここにある。

このような持続の哲学の根底は、『時間と自由』の第三章において独自の自由論に転回し、そして一九三〇年の「可能と現実」(『思想と動くもの』所収)においては人が問うべきでない「偽りの問い」に根ざす「形而上的苦悶」からの解放という実践的次元に結びつけられていく。これを彼の形而上学的展開からの宗教的指向性とみなすことができるだろう。

プラトン『法律』第一〇巻における魂の問題

土井裕人

プラトン最晩年の著作である『法律』は、新国家に制定すべき法律とその序文について、プラトンの代弁者として登場するアテナイからの客人を中心に論じられる対話篇であり、『法律』というタイトルながら取り上げられるテーマは多岐にわたっている。とりわけ有名なのが「プラトンの神学」(むろん単純に「神学」と呼ばれるべきではないが)とも称される第一〇巻であり、三通りの不敬虔な説とそれらを反駁する神論が展開されている。具体的には、①「神々は存在しない」という無神論の説とそれに対する「神の存在証明」、②「神々は存在するが、人間を顧みず無関心である」という説とそれに対して神が万物を顧慮する能力を持つという主張、③「神々は買収でき、罪を犯しても供物で赦しが得られる」という説とその反駁である。本学会における昨年の研究発表ではとりわけ②の無関心説に着目して神義論の問題を取り上げたが、『法律』第一〇巻においてこうした宗教思想の基盤となるのが①の無神論とその反駁であり、この議論において重要な位置を占めるのが「魂(プシューケー)」である(語の問題は大きいがここでは通例に従って「魂」としておく)。

『法律』第一〇巻で取り上げられる無神論は、物体を第一のものと見なして神的な魂を物質の下位に置き、法律で定められるような神々は人為的にすぎないと否定する、いわば唯物論的な立場に基づく無神論である。これに対して、魂が物質より先に在って始源となっていることを証明する問答が行われた上で、その証明が神々に関する正しい論であり、善なる神々、すなわち最善にして有徳であり宇宙全体を秩序的に導く魂と諸天体の魂としての神々が存在すると論証される。無神論に対する神の存在証明であるのに魂の存在証明というのは不思議に思われるかもしれないが、魂は物体などに先立って在るばかりでなく、他のものを支配し導くという働きを持つので、最上位に属する魂は神々ということになるのである。こうした神の存在証明は、魂と物体とどちらを先に立てるかという考え方の違いを起点とし、無神論が「極めて厄介な無知の一種」とされていたように神論に関わる知の在り方を問題とした自然学的議論でも

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

あった。しかし、アテナイからの客人が「神々について正しい考えを持ちながら立派に生きるか、それとも、その反対の生き方をするか」が何より重要と呼びかけるように、宇宙論的規模の神や魂の存在をめぐる議論は生のあり方にも深く結びついているだけではなく、魂が倫理的な側面も含めた全ての運動や変化の始源である以上（同じく後期著作の『ティマイオス』では神たる宇宙と照応関係にあることがより強調される）、個々人の魂のあり方が立派な生か不正な生か左右していくことになる。ここに初期以来の「魂に配慮して善く生きよ」というテーマを見いだすのは困難ではないが、『法律』では年上の立法者が若者を教え導くことで正しい生を実現していくという側面も表れている。不敬虔という誤った知を持った者を説得し正しい生き方に導くというモチーフは、無神論への反駁を承けて続く神義論的な議論、すなわち無関心説や買収可能説への反論において繰り返されていく。

魂や神をめぐる『法律』第一〇巻の所論は、善き魂として世界を統治する神といった宇宙論的なスケールを背景としつつ、神々に関する正しい知を持って善く生きるべく個人の魂も向き変えていくというものである。また、神義論の問題も含めていくと、その過程は年長の立法者が若者を教導していくだけでなく、正しい魂となる、すなわち善き生の実現を神々が守護し助力するものでもあった。このように、『法律』第一〇巻における魂をめぐる議論が、哲学的側面だけでなく、いわば「他力」的な救済という宗教的側面も持っていることは、特徴的な論点となっていると考えられる。

プロティノス哲学体系にみられる愛の階梯

堀江　聡

新プラトン主義の一応の出発点プロティノス（紀元後二〇五―二七〇）が、主題として愛（エロース）を採りあげた作品は、第五十論攷「愛について」である。この論攷では、愛は情念（パトス）として以上に、神として、ダイモーンとして捉えられる。それは、古代ギリシアの通念や神話語りを反映し、とりわけプラトン対話篇の所説を尊重するからに他ならない。したがって、愛は現代の我々の常識を遥かに越えた拡がりへと展開する。愛には、単純な積み重ねという構成ではないが、少なくとも七階梯は認められる。

まず、手近なところから始めると、われわれの魂の愛には三種類ある。原型たる知性界の美を忘却せず保持している場合、純粋愛といわれる。知性界の美を想起せず、似像たる感性界の美を現像と取り違える場合ですら、知性界への愛は顕在化せずとも存続し、あらゆる愛の動因になってはいる。ただ、知性界の美の観照に不足し、その欠を補塡するために実践に転ずる。つまり、美しいものを自ら産んで、その美を観照するという廻り道をとるのである。産むこと自体、可死的なものの連鎖の果てに、一種の美である不死性を仰望する行為であるが、美しいものを産むために美しいものにおいて産むことを欲求する。したがって、美しい産み手への愛という、本来の愛とは別の愛が

NII-Electronic Library Service